

海外インターンシッププログラム

派遣国・都市名	オーストラリア 西オーストラリア州 パース
研修先	西オーストラリア州・兵庫文化交流センター
プログラム実習期間	2019年8月6日～2019年8月17日
学部/研究科・学年	農学研究科 修士2年

インターンシップ就業実習 報告書

2週間という非常に短い期間であったが、オーストラリアという土地で、日本の代表として就業したこのプログラムでしか経験することができない貴重な経験であった。

3つの目標「日本を発信する業務に携わりたい」「海外で働き現地の人柄を考慮した業務を経験したい」「以前交換留学で9ヶ月間過ごした街パース に恩返ししたい」を掲げて業務に取り組んだ。結果的に、すべての目標を達成することができたことが最大の成果である。

日々の業務として行っていたことは、管理図書の借り貸し、在庫本の仕分け、提供するお菓子やコーヒーの補充などである。兵庫文化交流センターが所有する図書の貸出と返却業務は毎日行った。毎日センターの会員が日本語の図書もしくは日本に関する情報を持った英語図書を借りに来るため、そこで必要な事務作業を任せていただいた。また私たちの日本の漫画や本に対する意見や所感を信頼してくださり、どの本を処分するか、どの本を貸出図書に登録するかの仕分け作業も行った。加えて、毎週2日間行われるオーストラリア人向けの日本語教室の際に、訪問者へ提供するスナックやコーヒーといった嗜好品の補充作業も任された。これら以外は、訪問される方と英語もしくは日本語でお話しする中で日本に対する疑問へお答えすることを日常的に業務として行った。総じて、これらの業務は単純作業で容易に行うことができる作業であった。但しその中でも、上司の副所長は常に笑顔で周囲に笑顔を振りまくほど陽気に仕事をし、会員などの人前で話すときははっきりとした物腰で言葉を述べる on-off の切り替えの上手な方であった。その理由の1つには、日本とは異なり現地の人柄とも言えるべきことだが、訪問される会員が常に笑顔で初対面の方に対してもオープンな振る舞いをするためでもあった。そのような状況でなくとも、自分自身の長所である笑顔を活かして、将来は副所長のような上司になりたいと強く感じた。

2週間で最も貴重な経験となったのは、【St. Jones Anglican School への訪問授業】と【兵庫文化交流センター会員約40人に向けた日本文化紹介】である。学校訪問では、Preprimary (3-4歳) から Year 7 (12歳) の学生へ日本の文化紹介を行った。内容は、兵庫県夏のビッグイベントである甲子園と夏祭りをパワーポイントで紹介し、最後は全員で東京五輪音頭(盆踊り)を踊るというものであった。年齢幅が大きいクラス相手に、同じ内容を異なる見せ方で紹介することに非常に苦労した。また日本の一方通行の授業形式とは異なり、生徒と先生が一丸となって授業を作り上げていく会話形式の授業にすることを心がけた。例えば、時々質問形式で問いかけを行い、生徒が能動的に授業に参

加できるようにした。日本の学生とは違い、1つ問いかけをするとクラスの半分ほどの学生が手を挙げて積極的に答えようとする。これまでの学生生活でここまで積極的にクラス全員が先生の質問に答えようとする光景を見るのは初めてで感動した。私たちが伝えたかった日本の文化を若い学生にどこまで伝えることができたかはわからないが、笑顔で「ありがとう」と言って教室を去っていく学生を見た際に胸に熱くこみ上げるものがあった。日本含め保育園児から小学生に授業を行う経験はなく、初めての教員実習が忘れがたいものとなった。思春期前の子供に対して、どのように注意を惹きつけながら物事を伝えるか、その惹きつけ方見せ方を実践的な場で学ぶことができた。この場を提供して頂いた現地の学校、兵庫文化センター職員には感謝の念が絶えない。

就業最終日には、兵庫文化交流センター会員に向けて日本文化を各々30分の持ち時間でプレゼンテーションを行う時間があり、私は灘五郷で有名な兵庫県の日本酒に関する発表を行った。ここでも20代から70代まで幅広い聴衆に向けて発表を行い、いかに面白く、魅力的に、兵庫が誇る日本酒を伝えるかを学ぶことができた。実際のお猪口や徳利を利用したデモンストレーションも効果的に用いることができ、多くの人に笑っていただいたのが印象的だった。講義室ではなく、ソファに座る方、地べたに座る方、後ろで立っている方などリラックスした雰囲気であり、私自身が楽しんで発表を楽しむことができた。英語を用いたネイティブに対する発表は貴重な経験であり、加えて私が大好きな兵庫県の日本酒文化を共有することもでき満足できた。

一番行いたいと考えていた「海外という場所で日本の文化、特に兵庫県に関する情報を発信すること」を老若男女問わず幅広い年代層に対して行うことができ、満足のいくプログラムであった。来春から日本企業で働く予定だが、将来の自分の目標の1つとして世界各地で日本語の教師をしてみたいと強く感じた契機となった。その目標に向けて、今の自分また来春からの自分にできることに全力を尽くし、ここで得た経験を活かして、今後40～50年の就労生活の設計を組み直していきたい。

感想および意見

時間の流れが緩やかでリラックスした有意義な2週間をパースで過ごすことができた。働く中でも時間が逼迫したこともなく、ストレスフリーな就業実習であったと感じる。

勤務日は毎朝5時半に目覚め、8時10分のバスに乗り、帰宅後は10時から11時までの間で就寝するライフサイクルであった。毎朝規則正しく起床し職場へ通勤する経験ができたと共に、学生の自由度を改めて思い知った。

現場で就労した内容は、人前で話すプレゼンテーションといった楽しいものから、地味で英語も使わない事務作業まで幅広く行った。個人的に、就業中ストレスを感じることは全くなかった。行く前から予想はしていたため強く感じることはなかったが、英語を話したいと思いこのプログラムを申し込む学生であれば、英語を話す機会が少なく物

足りない気持ちを感じる可能性があると感じた。土曜日はオーストラリア人が職場に2人いるが、それ以外の日はオーストラリア人1人、日本人3人と過半数が日本人で構成され、オーストラリア人職員も日本語を理解できるため、日本語で話すことが多かった。また日常的に任された仕事も管理図書の借り貸しといった小さいものであり、英語を話す機会は少なかった。しかし、兵庫文化交流センターとして初めての試みである School Visit での日本文化紹介授業を任された。日本でも幼児教育、初等教育での教育実習は私の専門であれば経験できるものではない。非常に光栄で有意義な経験であった。幼少時期の子供（4-5歳頃）から小学校6年生（12歳）の学生に対して、日本の夏祭りとは兵庫県の甲子園に関する発表を、異なる伝え方を意識し30分間授業形式で発表した。私自身が経験した日本の教育と比べて、オーストラリアの教育方針の違いを明確に感じることができた。日本は先生が尊敬すべき存在として、学生が一方向的に聴く形式が一般的だと感じる。しかし、オーストラリアでは先生が学生と同じ目線に立ち、お互いに問いかけを交えながら生徒と距離の近い授業を行っていた。私も一枚一枚のスライドで質問を行い、子供達の注意を惹きつけることに注力しながら発表した。これまで経験したプレゼンテーションの中で、ここまで質問を交えたのは初めてであろうと感じる。将来海外で日本語教師になる私自身の1つの夢にとって貴重な経験をさせて頂いた。

インターンシップが終了した後の時間は、街中を歩くこと、また昨年交換留学中にできた友人と夕食を食べることが日課であった。しかし、オーストラリアに到着した2日後に風邪をひき、喉が痛くなり蓄膿のような症状が出てしまった。真夏の日本から真冬のオーストラリアへ行くため予想はしていたが、予想通りの結果となった。そのため2週目の月曜日に日本語医療センターへ診察に行った。海外保険に加入していて良かったと感じた。1週目から病弱な状態が続いていたため、食事だけはしっかりと栄養のあるものを摂取しようと考え、ほぼ毎日外食でしっかりと食事をした。お昼はみかんを購入してビタミンCを取り、出費はかさんだが自分の免疫で2週目の最後には復活することができた。旅行に関しては、昨年留学時に満足するほど行っていたのでこの2週間で行くことはなかった。しかし、毎日留学時の友人と9ヶ月ぶりに会うことができ、（風邪を除いて）私の中では楽しくいい思い出となった。

最後に、有意義で私の将来の人生キャリアを考え直す契機ともなった本プログラムにあたり、私を受け入れ教育していただいた兵庫県文化交流センター職員、HIAや県職員の皆様、派遣にあたって様々な事務手続き、面接などの対応を行っていただいた大学職員の皆様に厚く御礼を申し上げ、感謝の意を表します。

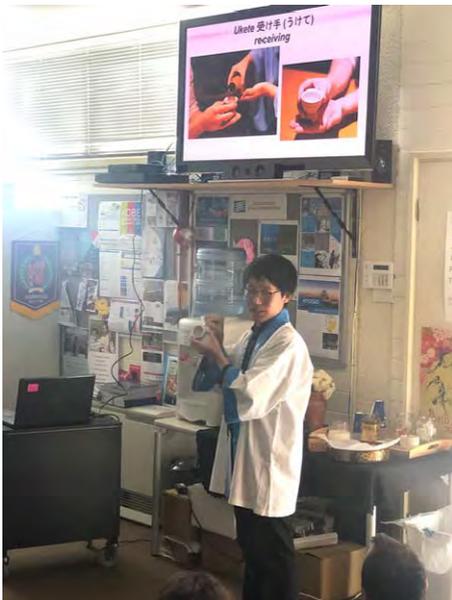
■ School Visit (8/14)



■ The atmosphere of Hyogo Governmental Cultural Centre



■ Saturday Presentation about SAKE (8/17)



■ Reunion with my friends

